「学び・対話し・分かち合う」研究会シリーズ

シェアラボれぽーと

追手門学院
成熟社会研究所

SHARE LAB. report

vol.5
つたえる

「シェアラボれぽーと」はシェアラボの内容や話し合ったコトをみんなにお知らせするニュースペーパーです

2015.6.18. 木 /16:00-19:00
会場：追手門学院大学　1号館 会議室5

●トークゲスト●
市村　元 氏
（関西大学客員教授 /「地方の時代」映像祭プロデューサー）

発行： 追手門学院 成熟社会研究所

シェアラボってなに？

「シェア（分かち合う）」「ラボ（研究）」は、共通テーマを軸に**人と社会のこれから**を考える研究会シリーズ（年間 計５回を予定）。

学院内外からのゲストによる講演＋みんなでギロンするワークショップを行います。

毎回、身近な動詞をテーマに、現状とこれからを考えます。

世代や専門の垣根を越えて、みんなで学び・対話し・分かち合うことで、新しい発見と気づきがきっとある！

ドリンク片手にリラックスした雰囲気で行い、**関心のある方はどなたでもご参加いただけます！**

プログラム① 映像上映
「千年後にとどけ　私たちの願い」
～被災地・女川 中学生の３年～

冒頭は映像上映会からスタート。

ゲストの市村元さんがプロデューサーをつとめる「地方の時代」映像祭※で 2014 年に放送局部門で入賞したドキュメンタリー作品（TBC 東北放送制作）を鑑賞しました。

東日本大震災の被災地である女川町で、中学生が震災と向き合い、未来に伝えていくためにできることを考え、実際に行動に移していく姿を追った作品です。震災で大きなショックを受けながらも、次第に成長していく中学生の姿に、参加者の皆さんは釘付けになりました。

※地方の時代映像祭とは？

「地域でなければ見えないもの、地方だからこそ伝えられること」を世の中に問い続け、1980 年より年に一度開催されている映像祭。全国各地の放送局、ケーブルテレビ局、市民、学生、高校生から毎年 200 を超える作品が寄せられている。主催は、吹田市、関西大学、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本ケーブルテレビ連盟。

プログラム② ゲスト講演
「地域から伝えること、から考える」

続いてのプログラムはゲストトーク。
関西大学客員教授の市村元さんに、「地方の時代」映像祭と過去の応募作品を紹介していただきながら、地方ドキュメント映像作品への思いをお話いただきました。

「地方の時代」映像祭の歴史

○**「地方の時代」映像祭**は、1980 年から続いている全国規模の映像祭です。毎年 200 を超える作品の応募があり、**全国で５本の指に入る規模**だと思います。

○「地方の時代」というネーミングには歴史があります。1970 年代に、当時の**神奈川県知事・長洲一二さんはじめ多くの社会学者や政治学者等が「地方の時代」という言葉を使い始め、**それに NHK を含む全国のテレビ局が呼応して、「地方の時代」映像祭が始まりました。

○最初は長洲知事の縁で神奈川県川崎市において開催しました。その後、埼玉県川越市を経て、現在の吹田市で開催されるようになったのは 2007 年です。

○これまでの**コンクール出品作品は 4530 作品**ほどになりました。

ゲストプロフィール

市村　元 氏（いちむら・はじめ）
（関西大学客員教授・「地方の時代」映像祭プロデューサー）
TBS 報道局で記者、パリ支局長等を経て、「ニュース 23」担当部長、「報道特集」プロデューサーを歴任。その後テレビユー福島常務取締役を経て、現職。

映像紹介①「国策」に翻弄される「小さき民」

○北海道の北炭夕張新炭鉱でのガス突出事故、そして石炭産業が崩壊していく中で切り捨てられたいろいろな問題を取り上げた「地底の葬列」。
○「わが故郷は消えても」は、ダムに沈む村を 25 年に渡って追いかけた作品。

映像紹介② 地域が直面する現実

○石川県の志賀町と珠洲市の話「シカとスズ」。限界集落化が進む志賀町と珠洲市。1993 年、志賀町に原発ができました。一方、珠洲市では原発をめぐって大きな混乱が起こり、市民の憎しみ合いが続きました。珠洲市に結局原発はできませんでしたが、原発ができるできないにかかわらず、地方は衰退していくという現実が映し出された作品です。
○「オレは百姓だ」は、秋田県の湯沢市の隣、羽後町の中山間地で、〈都会なんかに負けない〉という決意を歌にしている農民４人によるフォークグループを追った作品。時は流れ、今は農業をやっているのはただ一人きりです。農業が追い詰められて崩壊していくという地方の現実を、都会はもっと知るべきだと思います。

映像紹介③「小さき民」の側から

○大阪府立柴島高校で、部落出身であることを子供たちが隠さず、卒業式で自分の出身の部落を述べて決意を表明するという「伝える言葉」。
○「ふつうの家族」は、障がい者同士の結婚と子育ての 22 年間を追いかけた作品。手はうまく使えないので口や足を使ったりして、家事をやりながら育てていきます。大きくなった息子さんが「大変じゃないですよ。僕たち普通の家族ですよ」と話す、感動的な作品です。
○地方という地理的な問題だけでなく、追い詰められたり差別されたりしているという弱者の立場から考えるという視点です。

映像紹介④ 地域の活力を生かす

○地方の苦悩を映し出す作品がある一方、地域での取り組みがうまくいって活性化につながっている、という作品もあります。

○典型的な過疎・高齢化の地で、老人で何でもやろうよと、道路の改修から畑作りまでやって、ついには〈やねだん〉という芋焼酎を作って売り出したという、人口 300 人でも活気にあふれた鹿児島の集落を追った「やねだん」。
○「里海　瀬戸内海」は昨年のグランプリ。瀬戸内海の自然を回復させるために牡蠣養殖を行い、アマモを植えます。人間が自然を壊す一方で、自然を回復させるために人間が手をかけるということもあると伝えます。
○地方の作品の特徴は、数十年前と同じ場所を取材するなど、長い時間をかけて追いかけていることです。

映像紹介⑤ ともに生き、記録する

○「イナサ　風寄せる集落の四季」は 2007 年に優秀賞をとった作品。仙台市の郊外・荒浜地区で、昔ながらの半農半漁で暮らし、農村文化が息づく姿を描いています。2010 年に東京で開催された作品の上映会から 4 ヶ月後、東日本大震災により荒浜地区は黒い波に呑まれて姿を消しました。作品を撮ったカメラマン・伊藤さんはずっと荒浜地区を追いかけ、震災から 1 年間かけて「イナサがまた吹く日」（2012 年グランプリ受賞）という作品を作られました。

「今こそ、地方ドキュメント映像を」

○地方、地域をテーマにした作品を目にするチャンスはなかなかありません。特に民放の作品は全国放送されることがほとんど無く、放送されても深夜枠です。それでも地域の数々の問題を掘り下げた作品は山のようにあります。
○現在、テレビ番組を地方で制作することは、財政的に難しい状態になっています。しかしだからこそ、こういうド**キュメントを紹介して道を開いていかないといけない**と考えています。
○「国民国家」優先の「中央集権社会」の構築が戦後 30 年の間に進みました。その後も、「市場経済優先」「効率主義」のために**地方がおしつぶされ、公害、貧困、格差、過疎、地域文化喪失、人間疎外といったひずみ**が全国的に起こってしまっています。
○**「地方の時代」とは、人間を回復していくためのキーワード**だと考えます。今こそ、地方や地域にこだわってものを作り続けなければいけないと思っています。

プログラム③ グループトーク＆発表

みんなで考える
「地方から伝えること」

**グループに分かれて、映像作品や地方ドキュメントについて、
それぞれが思うこと、考えたことなどを意見交換！
各グループの発表をご紹介します。
今回は学生参加者が発表を担当しました。**

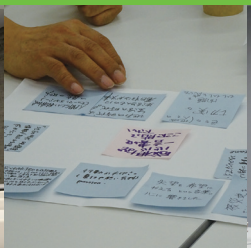
被災地でのドキュメント「千年後にとどけ」を鑑賞して。

●映像のすごさを感じた。（「千年後にとどけ」での）中学生の意識の高い姿勢を見習っていくべき。追大生、若い世代も、もっと“伝える”こと、“表現する”ことを。

●災害などの大きなマイナス変化要因が起きた時に備えてできることを考えた。
①勉強すること（情報を身につける）②近所の人とささいなことでも情報共有しコミュニケーションを大切にすること　によって対策がとれるのではないか。

●被災地の中学生が、自分たちがまちをよくしていくためにできることを探して取り組んでいることに、勇気をもらった。

●年齢なんて関係ない。自分から情報をたどって、もっと日本を見つめていくべき。
中学生でここまでできたのは、被災地でしか分からない感情があって、それによって意思をひとつにしたからできたのではと。
でも中学生だけでできないこともあるので、今後を大人たちがどうカバーしていくのかも大事。



地方ドキュメント映像の数々から感じたこと。

●映像から感じ取ったことがいっぱいある。
伝わった僕らは次に何をすればいいのか？
（同じグループの方に）「今は感じるだけでいいから、興味ややる気が出てきた時には地方へ行けばいい。正義感だけで行っても相手が困るだけ」といわれてもっともだと思った。
地方のいいところをもっととりあげて盛り上げ、人が集まり注目されたら弱みを伝えていけば都会の人にも伝わるのかなと考えた。

●自分たちに何ができるかと考えた時、今日知らないことをたくさん知ったので、それを「人に伝えていく」ことは出来る。まずは友達に伝えるといったことを今日明日から始めていきたい。

●地方といえば、過疎や高齢化などマイナス面にとらえがちだが、小さいからダメでなく、小さいからこそ出来ることや魅力・価値があると感じた。自分とは違った視点で物事をみることが大切。
普段耳にする情報はメディアからだけで偏りがある。自分たちで考えて判断し、情報を的確に処理していかねばならない。

●日ごろから、たくさんある情報源を、自分たちで積極的に選んでつかんで考えることが大切。

●こんなにいっぱいいい映像があるのだから、もっと（学生や一般の人が）見る機会を増やして欲しい。

まとめ、のようなもの。

映像、言葉、文章、表情、図形など、人は「つたえる」ためのあらゆる手段を持っています。ところが「つたえる」という動作が、一方的な矢印となっている時があります。「ちゃんと伝えたから！」と投げ手が思っていても、受け手の懐に届いていなければ、それは何の意味もなく、つまり本来の「つたえる」の機能を果たしていない状態です。だから、「つたえる」ということの主役は伝えたい相手であり、実は双方向の矢印であると思っています。シェアラボも毎回、参加者にテーマが伝わっただろうか？　何かを持ち帰ってくれただろうか？　と思いながら運営しています。これからも「つたえる」ことに丁寧に向き合っていきたいと思います。（な）

今後のシェアラボは・・・

第２期は「ととのえる」
を共通テーマに
展開しています！

シェアラボについてのご意見・お問合せは…
seijuku@otemon.ac.jp（担当：中川）まで !!

追手門学院
成熟社会研究所
〒540-0008
大阪市中央区大手前 1-3-20
追手門学院　大阪城スクエア内
TEL：06-6948-5835
FAX：06-6948-5836

○茨木キャンパス内分室
〒567-8502
大阪府茨木市西安威 2-1-15
研究棟１階 107 号